

The Journal
of
Flannery O'Connor

✧ フラナリー・オコナー研究 ✧

第4号

日本フラナリー・オコナー協会

January, 2025

目次

【巻頭言】

第4号発行にあたって

会長 田中 浩司 (3)

【論文】

「善良な田舎の人たち」—無意識のうちに囚われる権威の罟

加藤 良浩 (5)

【会則】

(17)

【投稿・執筆規定】

(19)

【活動報告】

(20)

【事務局より】

(27)

【筆者紹介】

(28)

第4号発行にあたって

日本フラナリー・オコナー協会会長

田中 浩司

フラナリー・オコナー生誕百周年を迎える2025年、本年は彼女の文学的遺産を再評価する重要な一年となる。世界各地で記念イベントや国際会議が開催され、オコナーの作品がいつか時代や地域を超えて読み継がれているかを実感させられる。ジョージア・カレッジ、フォーダム大学（ロンドン）、マドリード・コンプルテンセ大学、トルンのニコラウス・コペルニクス大学など、欧米各地での学術的集まりは、オコナー研究の新たな潮流を生み出す契機となるだろう。これらの場では、彼女の作品における「グロテスク」の美学、宗教的要素、そして暴力と恩寵の関係が多角的に論じられ、現代文学研究の視点からもその意義が再確認されることが期待される。

こうした国際的な動きの中で、日本におけるオコナー受容の意義を改めて考えることは、本誌の役割の一つでもある。彼女の作品が照らし出す「グロテスク」な現実、現代社会の不安や暴力、宗教的アイデンティティの揺らぎといった問題と無関係ではない。特に、ウクライナとロシア間の戦争、イスラエルとガザの衝突など、世界の紛争がもたらす悲劇や、人間の無力感が覆う中で、オコナーが描いた「恩寵」と「破滅」の交錯する世界は、まさに現代の状況を映し出している。彼女の短編小説に登場する登場人物たちは、しばしば救いと絶望の狭間に立たされるが、それは現在の混迷する世界の人々が抱える感情と響き合うものがある。

これらの問題は単なる地域紛争にとどまらず、国際社会全体に波及する影響を及ぼしている。移民問題、宗教的対立、そしてそれに伴うアイデンティティの危機といった課題に、オコナーの作品が提示する倫理的問いは深く関わっている。彼女の描写する暴力や恩寵の瞬間は、現在の混乱の中でもなお人間性の本質を探求する手掛かりを提供している。オコナー作品における登場人物たちは、過酷な状況に直面しながらも、自己の信念や道徳的選択を試される。その過程で、彼らはしばしば予測不可能な恩寵に直面し、それが読者に強い印象を残すのである。

本年、日本フラナリー・オコナー協会は設立12周年を迎え、本誌も第4号を発行する運びとなった。昨年、野口肇会長がご体調不良により会長職の辞任を申し出られたため、ご本人の意向を尊重し、会の承認を得て、僭越ながら私が引き継ぐこととなった。この場を借りて、野口前会長の本会の創設から今日までのご尽力に心より感謝申し上げますとともに、微力ながら本協会の発展に尽力したいと思っている。

協会の活動としては、今年度も日本国内でのオコナー研究を深めるための大会や読書会の開催を予定している。会員も徐々にではあるが増えているので、様々な視点からオコナー作品の新たな解釈を模索する場でありたいと考えている。

世界各地で開催されるオコナー生誕百周年の記念行事が、日本の研究者や読者にとっても新たな刺激となり、さらなる議論を促すことを願ってやまない。本誌が、オコナー文学を通じて現代を見つめ直す一助となれば幸いである。

2025年1月

【論文】

「善良な田舎の人たち」—無意識のうちに囚われる権威の畏

加藤 良浩

はじめに

「善良な田舎の人たち」(“Good Country People,” 1955) は、フラナリー・オコナー (Flannery O'Connor) の最初の短編集『善人はなかなかいない』(*A Good Man Is Hard to Find*, 1955) に収められた作品である。オコナーによれば、他の自身の短編に比べ技術的なことは意識しないまま書き進め、その過程で、自分でも予想しなかったプロットの構想が次々と湧いてきたとい (Gooch 254-255)。アレン・テイト (Allen Tate) とキャロライン・ゴード (Caroline Gordon) はこの作品を高く評価し、今度出版される短編集にはぜひ組み入れるべきであると主張し、編集者のロバート・ジルー (Robert Giroux) も作品の最後の部分の改善を提案しつつも、テイトらの意見に強く賛成している (Gooch 255)。オコナー自身もまた、作品の完成度に自信を持っていたようである。彼女は、ほぼ四日で書き上げたこの作品の出来栄えがとても気に入っていると述べている (HB78)。

物語の前半では、農場主のホープウェル (Hopewell) 夫人と雇用人のフリーマン (Freeman) さんの関係が示された後、ホープウェル夫人の現在三二歳になる娘ジョイ (Joy) ことハルガ (Hulga) が、十歳のとき狩猟の事故にあったことが語られる。彼女はその事故で片足が撃ち飛ばされ、以来義足を身につけるようになったが、この義足が、その後彼女の知的優越性を支える上での象徴的役割を果たしていくことになる。実際、オコナーが述べているように、物語の終わりの部分で、聖書のセールスマンと自称するポインター (Pointer) にこの義足を持ち去られてしまったとき、「現実には自分が思っていたほど賢明なわけではないことに彼女自身気がついた」 (HB170) と言える。このことは、義足が彼女本来の純真な気持ちを奪い、知的に優越しているという傲慢な意識を彼女に抱かせる役割を果たしていたことを示しているであろう。それでは、いかなる理由で、彼女にとって、義足が彼女本来の気持ちを欺く精神的な支えの役割を果たすに至ったのであろうか。また、明らかにアイロニーが込められていると考えられる「善良な田舎の人たち」という表題には、この義足を奪われてしまうという出来事と関わって、どのような意味が込められているのだろうか。

1

ホープウェル夫人がフリーマンさん一家を雇ったのは、彼らが「屑ではなく善良な田舎の人たち」 (272) ² だからである。もっとも、彼らを雇うのにはためらいはあった。彼女が身元保証人に一家について照会した際、フリーマンさんの亭主の方は良い人だが、彼の妻は「この世で一番の詮索好きな人物であ

る」(272)ため、雇用主のことも何でも知りたがるだろうし、その保証人も彼の妻も、フリーマン夫人のそばにいることは一分たりとも我慢できないだろう、と警告めいた返事を受け取っていたからである。結局他に応募者がいなかったため、彼らを雇うことに決めるが、ホープウェル夫人も、フリーマン夫人への対処策をあらかじめ心の中で講じることを忘れてはいない。彼女は、「その女がどんなことにでも鼻を突っ込まずにはいられない人間なのだから、好きなようにさせるだけではなく、いっさいのことへの責任を持ってもらうため、むしろすべてのことに鼻を突っ込むように取り計らってやるのだ」(272)(斜体原文)との心づもりをする。

このような彼女の気質について、「ホープウェル夫人の気質には何ら悪いところがないばかりか、彼女は他人の欠点を欠点として受け止めずうまく利用することができる」(272)と述べられている。この描写は作者の視点からではなく、ホープウェル夫人自身の視点から述べた描出話法による表現と見ることができるかぎり、たしかにここには、彼女の自惚れの気持ちが表れていると解釈できる。しかし、続けて、「彼女はフリーマン夫妻を雇い、今では四年になる」(272)と述べられていることを考慮すれば、意味合いが異なってくるであろう。つまり彼女が、身元保証人がそばにいられたら一分たりとも我慢できないとまで言い切るフリーマンさんをこれまで四年間、農場経営のため雇用してきた実績を考慮した場合、その彼女の気持ちが込められた言葉には、あながち自惚れだけとは言い切れない農場主としての自信が反映されていると言える。

実際、フリーマンさんは、「人がひそかに感染した病気、人目には隠された奇形や子供への暴行」(275)、病気ならば「長患いや不治の病気」(275)といった不幸な出来事に強い関心を示すような、癖の強い性格の持ち主であり、そればかりか、いつもホープウェル夫人とハルガの食事の途中でやって来ては食事の間居座り続ける礼儀をわきまえない人物である。とりわけホープウェル夫人には、そうしたフリーマンさんの行動は腹立たしいものであったが、彼女は「忍耐力の非常に強い女」(273)であり、「完全なものは何もないということ、フリーマン一家は善良な田舎の人たちであると言っていいこと、そして今このご時勢に、善良な田舎の人たちを雇うことができたなら、その人たちを手ばなさない方がいいということ」を彼女は心得ていた」(273)。つまり彼女は、「完全なものは何もない」といういわば世俗的に格言と化した言葉を支えに、持ち前の強い忍耐力で、「善良な田舎の人たち」と思えるフリーマンさんを含めた一家を現実的配慮から雇用を続けることを決めるに至っている。

ホープウェル夫人がフリーマンさんを善良な田舎の人、ひいては「立派な婦人」(斜体原文)(272)だと見なすのは、それまで小作人たちを相手にしてきた彼女の経験によっている。「フリーマンさんたちが来る前に、彼女は平均して年に一回、小作人を代えた。こういう農夫たちの女房たちは、長い間そばにいてもらいたいと思うような人たちではなかった」(273-274)と述べられる。ホープウェル夫人にとって、フリーマンさんが善良に思えるのは、このように、これまで経てきた苦い経験の結果、フリーマンさんが相対的に善良な人間と感じられるからである。

ホープウェル夫人が一般に普及している世俗的価値を重視していることは、「娘が哲学博士の学位を取ったため、途方にくれてしまった」(276)と感ずる彼女の心境に表れていると言えよう。彼女は人に、娘が「看護師」や「学校の先生」、あるいは「化学工学の技師」だとは言えるが、「哲学者」だとはとても恥ずかしくて言えない。「そんなことが言える時代は、ギリシャ人やローマ人とともに終わってしまったのだ」(276)と彼女には思える。

世俗的価値観を重視しようとするホープウェル夫人の志向は、世俗において格言と化しているような決まり文句を彼女が好んで口にもすることに表れている。「完全なものはない」(272)、「これが人生だ」(273)との言葉をはじめ、彼女はとりわけ、「ほかの人にもそれぞれの考えがある」(273)という言葉を何ら疑念なく受け入れ、好んで使うが、それはやはり、世間の人々一般に権威あるかの如く無条件に受け入れられている言葉だからである。

彼女がフリーマンさんを善良な田舎の人と見なすのは、フリーマンさんが彼女と同様、世俗的価値を重視していることも原因しているであろう。フリーマンさんには二人の娘がいて、一人は18歳になる赤毛のグリニーズ(Glynese)で、言い寄ってくるたくさんの男がいる。もう一人はブロンドのキャラミー(Carramae)で、まだ15歳だがすでに既婚で妊娠している。ホープウェル夫人とフリーマンさんは、いつも天候の挨拶をすませた後この二人の娘のどちらかの話をしているが、この二人の娘は、家族という世俗的価値を重視する親の視点から見た場合、既婚であるかすぐにでも結婚しようという点で、世俗の価値に適合するいわば普通の娘である。また毎朝フリーマンさんは、何を食べても胃にとどめておくことのできない娘のキャラミーが、前日話して以来何度吐いたかをホープウェル夫人に報告している。このこともやはり、精神とは対照的な身体に関わることを話題として好む、二人の世俗的価値の重視の姿勢を反映したものだと言える。

ホープウェル夫人にとって、彼女が「感心する」(282)ほど、世俗の「常識を身につけている」(282)ように見えるグリニーズとキャラミーは「二人ともいい娘(fine girls)」(281)である。夫人から見た常識の基準とは、身体への関心と配慮であることに加え、キリスト教の信仰心を抱いていることであるが、彼女たちはその基準を満たしているからである。フリーマンさんが語ったところによると、結婚に際してキャラミーの夫のライマン(Lyman)が、「たとえ五百ドルもらっても説教師に結婚してもらうのをやめる気はない」(281)とキャラミーに伝え、またグリニーズは相手の男に対して、「たとえ三十六年型のプリマスしか持っていなくても説教師に結婚式をあげてもらおうとするような男と結婚したい」(282)と述べている。こうしたフリーマンさんが間接的にあるいは直接聞いた言葉に対し、ハルガは、冗談めいて「それじゃ、何ドルもらえばやめれるの？」(281)、「三十二年型のプリマスを持ってたらどうなの？」(282)という質問を発している。キャスリン・フィーリーが言うように、「これらのユーモアのある言動は、物語の結末でハルガが自分の置かれた滑稽な状況に気づき、新たにジョイとして生まれ変わる可能性を示唆している」(Feely 25)とも考えられるが、ここでのハルガの言動そのものは、二人の発言が世俗の価値を受け売りしただけのものであることを見抜いた彼女が、フリーマンさんに向かって当てこすりの質問をしたものではないか。彼女の質問に対してフリーマンさんは、「五百ドルもらいたくないとライマンは言ったんですよ」、「グリニーズが三十六年型のプリマスだと言ったんですよ」と、いわば硬直的な聞いたままの言葉でしか応じることができないが、それは彼女たち自身の発言が自ら考えたものではなく、世間で言われているままの価値を受け流しているにすぎない、という事実を反映しているからであり、フリーマンさんへの彼女の質問はそれを見透かしたものだと考えられる。

ホープウェル夫人が、「人生とはこういうものよ」(273)と発言するとフリーマンさんは、「私はいつもそう言っていますよ」(273)と答える。この時のフリーマンさんは、あたかも「誰が何を思いつこうと、最初に彼女が思いつかなかった考えは一つもなかった」(273)と、彼女の自意識過剰な一面すら感じさせる様子が述べられている。次のように、二人の間でなされるこれと同様の応対の前半部分では、フリーマンさんとホープウェル夫人では同じ言葉に対し少し異なる見解を抱いていることが示唆されている。

「人はみな違いますから (Everybody is different.)」とホープウェル夫人は言った。

「そうです、たいていの人は (Yes, most people is.)」とフリーマンさんが言った。

「世の中を作るにはあらゆる種類の人々が必要ですからね」

「私はいつもそう言っていますよ」(273)

「人はみな違う」という言葉自体を無条件に受け入れているホープウェル夫人の発言に対して、フリーマンさんは「たいていの人は違う」と、その言葉にやや疑念を感じていることを示す発言で応じている。このことは、世俗的な価値とは違う価値の存在を彼女自身認識していることを示している。この観点からすれば、「私は頭の働きのいつも速いんです」(273)との、またはもや自意識過剰な一面を覗かせているような感がある彼女の発言は、自意識過剰というよりむしろ、他人の気がつかないことに気がつくため先回りして早熟的確な判断ができるとの彼女の自負心によるものだと言える。

「フリーマンさんは夫よりも頭の働きの速い」(273)と作者によって語られ、またホープウェル夫人が、「あなたは主導権を握っている車輪なのね」(273)と、フリーマンさんが頭の働きの速いゆえ物事的主导権を握る人物である旨の発言をしていることも、物事の判断的的確さに対して抱く、彼女の自負心の正当性を相応に裏づけているであろう。

「ホープウェル夫人が決まり文句を言うのを聞く時ほどジョイを憤慨させるものはない」(Brinkmeyer 146)、とロバート・ブリンクマイヤーが述べているように、世俗的価値を有する格言的決まり文句を好んで発するホープウェル夫人に強い反感をおぼえるのは、娘のハルガである。普段夫人が、「ほかの人にもそれぞれの考えがある」(273)といった言葉を「自分以外こういう考えを持っているものはないといったふうに」(273)断固とした調子で口に出すとき、ハルガはその母親の言動に、いつもの方法で拒否の姿勢を示す。彼女は、「氷のように青い眼は何も見えず、意志の力で盲目になり、その状態を維持しようとしている」(273)かのように、怒りで慄然とした顔を母親からそむける。

彼女は自分が理解した哲学的思想の誇示という手段を使っても、格言的な決まり文句を口にする母親への拒否の姿勢を示そうとする。始終不愛想にしている娘の表情を見たホープウェル夫人が、「微笑は誰も傷つけることはないのよ」(276)と発した言葉を聞いた彼女は、理由もなく立ち上がり、「女よ! あなたは自分の内面を見たことがあるか? 内面を見て自分とは違う存在を見たことがあるか? 神よ!」(276)と叫んだ後、自分に都合のよい解釈でフランスの哲学者マルブランシュ (Malebranche 1638-1715) の言葉を引用する。³

ホープウェル夫人に対するハルガの反抗的態度は、行動面においても見られる。がっちりとした体格の彼女は、朝台所にどしどしと「恐ろしい音」(275)

をたてて入ってくる。夫人はそれが「不快な響き (ugly-sounding)」であるがため、わざとやっていることを確信する。また、畑を歩く際に夫人が付き添いを頼んでも、ジョイの返事はいつも「あまりにも不快で、その顔はあまりにも陰気でむっつりとしている」(274) ため、同伴してもらうのを断るほどである。

ホープウェル夫人がこうしたハルガの態度を大目に見てきたのは、彼女が十歳の時に狩猟の事故で片足を失ったことへの悲しみと同情の念を禁じ得ないからである。彼女は、娘が「今まで一度もダンスをしたことがなく、正常な楽しい時を送ったことがないと考えると胸が張り裂ける思い」(斜体原文)(274)を感じずにはいられない。二十一歳になって故郷を離れたとき、彼女は法律上の手続きをして名前をジョイからハルガに変える。ホープウェル夫人は娘が熟慮の末、「最も不快な (the ugliest)」(274) 響きと意味を持つその名前を思いついたのだと確信する。

実際、ハルガという名前の彼女の着想はその「不快な響き (ugly sound)」(275) にもとづいているが、その名前が醜悪な音とぴたりと適合しているため、「自分がなした最高の創造行為」(275) であると彼女には思えたほどである。彼女がこうして故意に、母親に対して不快な思いをさせようとする行為を繰り返し、またその母親に対する反抗的行為が作者によって「故意の粗暴 (deliberate rudeness)」(280) と描かれていることから見ても、この彼女の名前の変更は、フレドリック・アサルスが言うように、「母親に対する意図的な反抗であり、ホープウェル夫人が象徴するすべてのことに対抗して自己の定義をしようとする行為」(Asals 99) であることは明らかである。

さらに、ハルガのこの反抗の性質は、彼女の服装にも反映されていると言える。彼女は「一日中、六年も着古したスカートをはき、馬に乗ったカウボーイの姿が色あせた黄色いセーターを着てすごしていた」(275) が、それを見たホープウェル夫人は「その服装がばかげていて、彼女がまだ子供である証拠にすぎない」(275) と思う。いみじくも夫人の感想として述べられているように、三十二歳にも関わらず、ハルガはまだ子供のような気質から抜け出てはいない。このことは、彼女の改名という手段による反抗そのものも、子供らしい、母親に半ば甘えるような反抗のための反抗的な性質を持つものであることを示している。

フリーマンさんはハルガと二人きりのとき、彼女の言葉の後に続けてハルガと付け加えるようになるが、それは改名に関わって、反抗を自分にとって正しく力強いものを感じさせようとするジョイの密かな心のうちを見抜いたからであろう。名前を呼ばれた「ジョイーハルガ」(275) は、「まるで自分の秘密が侵害されたように顔をしかめ、赤らめ」、気持ちがいらいらだつ。彼女は、フリーマンさんの「きらめく鋼鉄のように鋭い目 (beady steel-pointed eyes)」(275) が「顔の奥深くまで貫き通してある秘密の事実」に達したかのように感じると同時に、どうやらフリーマンさんを魅了する何かがあることに気がつく。やがてそれが彼女の義足であるとハルガは知る。このことは何を意味するのだろうか。前述のように、フリーマンさんは不幸な出来事や不治の病に強い関心を示すが、それが義足とどう結びつくのだろうか。

ホープウェル夫人が格言的な決まり文句を口にする背景には、それがキリスト教の信仰と結びつく善として許容されることを彼女が察知しているがため、その言葉を発することで、信仰心の厚さを認めてもらいたいと思う意図があることがうかがえる。「私はただの田舎者です」(278)と述べたポインターに対し夫人が、「善良な田舎の人たちは地の塩です！」(279)との聖書の言葉で反応した後、続けて彼女が聖書の言葉を彷彿させるいくつかの格言的な決まり文句を述べていることや、相手が望んでいることを巧みに嗅ぎ取るポインターが、彼女に対して、「奥さんがキリスト教徒であることがよくわかります。お顔の線の一つ一つにそれがあらわれています」(278)と述べていることがそれを裏づけていると言えよう。

だが、ホープウェル夫人が客間に聖書がないことを指摘された際、彼女はそれを返事として答えたベッドの脇ではなく屋根裏部屋のどこかにしまっていることが明らかになるように、彼女は日頃から決して、いわば誠実な信仰の実践を心がけているわけではない。

彼女が日頃好んで口にする言葉と実際の思考にも違いが見られる。日頃彼女は、「私たちはみな、それぞれ違うやり方があるわ。この世を動かしていくためにはいろんな種類の人間が必要ですよ！」(273)と述べ、それぞれ固有の特質を持つ人間であるべきだとの考え方を示している。しかし、彼女はジョイが個性的になることは認めることはできない。彼女には、「年ごとにジョイが、ほかの人とは違うようになり、逆により彼女らしくなっていくように見える」(276)。そしてその姿が、「太って、粗暴で、藪にらみになってくる」

(276)といったように、彼女が他の人との差異が生まれ、個性的になることに對して否定的な見方をしており、この点で、「いろんな種類の人間が必要であるとの彼女の発言の真意に対する信憑性は疑わしい」(Paulson 50)と言える。結局こうして、ホープウェル夫人が好んで口にする言葉と現実の考えにずれが起こるのは、その格言的決まり文句をあたかも権威ととらえ、それを無批判に受け入れようとしているからであろう。

ポインターはホープウェル夫人に向かって、「奥さんはクリスチャンとしての務めが正しいと信じていますよね」(278)と彼女の歓心を買おうとするかのように問いかける。彼女から肯定の答えが返ってくるや、「わかっていますとも、奥さんはとてもいいかたです (you're a good woman.)。友達がそう言っていました」(278)と言葉を返す。その言葉を聞いたホープウェル夫人は、「愚か者だとは思われたくなかった」(278)と述べられている。ここでポインターが言う「いい」とは、ホープウェル夫人がポインターの人物を説明する場合と同様、「とても誠実で、純真で (so sincere, so genuine)」(280)キリスト教の信仰に「熱心 (earnest)」(280)であるという意味を意図していると想定されるが、夫人はそのようには必ずしも受け取らず、ちょうど娘のジョイが、体調に問題がなかったら、「こんな赤い丘や善良な田舎の人たち (good country people) からは遠く離れて暮らしているだろう」(276)と述べている場合の「善良な」と同様の意味として受けとめていてと解釈できる。すなわち、誠実で純真な気質を備えていながらも、大学で講義する際に「自分の言っていることを理解してくれる」(276)ことのない人間、つまり、無知なため理解力に乏しい、あるいは既存の価値を批判し新たな見解を持つとしない人間であるという意味としてむしろ受けとめていてと考えられる。

ポインターは、ホープウェル夫人だけではなくハルガの歓心も買おうとする。彼女が片足であることを認めた彼は、彼女の勇氣とやさしさをたたえた上で、「おれはあんたがドアから入ってくるのを見た瞬間に好きになった」

(283) と彼女に言う。さらに彼女の知的優越意識をくすぐるかのように、「おれは眼鏡をかけている女が好きさ」(284)と語りかける。

ピクニックへ行くことを約束した日の夜、彼よりも知的に優越していると考えるハルガは、「彼の悔恨を引き受け、それを作り変えて、人生のもっと深い理解へと導く」(284)ことを想像する。自分のような「真の天才は、劣った精神を持つ人間にも考えをわからせることができる」(284)と彼女は思う。彼女は彼にキスをさせても感情を理性が支配していることに満足し、彼に対して語りかける。「私の考えでは、私は救われていてあなたは地獄に落ちているの。でも、さっき言った通り、私は神を信じていないのよ」(286)。そして、幻想を抱かない自分は無まで見抜いてしまう人間であり、いくつも学位を持っているのだと告げ、いかに自分が理性的な人間であるか、しかもその理性が知性の力を伴っているがため、真実を見抜くことが可能になっているのかを彼に誇示しようとする。

4

ポインターは自分を愛している証拠として、「義足が足につながっているところを見せてくれ」(288)とハルガに囁きかける。彼女はこれまで受けた教育のおかげでこの要求に対して少しも屈辱感を感じることはなかったものの、義足は彼女にとって、個人の秘密が隠された特別な存在であり、他の誰にも見せることも触れさせせることもないものであった。「なぜ見たいの？」(288)と問いかけた彼女に対し、彼は、「なぜって、その足のせいであんたはほかの人と違うからだよ」(288)、と彼女の秘密を見つけたように答える。このとき彼女は、「この若者は、知恵を越えた向こうにある本能によって、彼女の真実に触れた」(289)と感じ、「生涯で初めて、ほんとうの無垢と向き合っているのだ」(289)と思う。彼女が身をゆだねるような調子で彼に許諾の意向を示したとき、彼女には、「自分の命を失って、奇跡的に再びそれを彼の中に見いだした」(289)ように思える。こうして、「獲物を求めて町をあさりまわる犬のような悪魔的存在」(野口 51-52)とも言うべきポインターは、義足を奪うため巧みにハルガを誘惑し成功する。

しかし、ここで着目すべきは、フィーリーが言うように、「彼の一連の悪魔のような行為を通して、ハルガことジョイを恩寵へと導く準備をさせている」

(Feely 24) ことである。物語の最終場面近くで、「青い姿(blue figure)」

(291)のポインターが緑色の斑模様の湖を越えていく光景、まさに「キリストの特徴を表したイメージと符合する光景」(Asals 71)が目撃されているのは、比喩描写あるいは寓意描写のレベルにおいて、彼がハルガを恩寵の働きで無垢な状態へと立ち帰らせるキリストの如き救世主の役割を担わされていることを示している。この意味で、彼女がポインターに義足を取られた場面で直感したこの無垢への回帰は、彼女にとっての救済のあるべき真実を描いたものであり、一度失った命を奇跡的に彼の生命の中に見いだしたと感じたのは、その後恩寵によって彼女が本来あるべき姿に立ち返る可能性を予告したものと受けとめることができる。

もちろんここでは、比喩レベルの描写と現実レベルの描写が並行して進行しており、現実のレベルにおいて、ハルガは義足を無残にも奪われ彼の偽の聖書売りとしての実際の姿を見ることになる。トランクの中に入っていたのは空洞になった聖書と、その中にウィスキーの瓶と猥褻な絵が描かれたトランプと避

妊具であった。それを見たハルガは、催眠術にかかったかのように身動きができなくなったが、やがて懇願するように、「あなたって、ただの善良な田舎の人なんじゃないの？」(290)と尋ねる。この問いかけに、「彼女が彼を侮辱しようとしているかもしれない」(290)と気づいた彼は、「あんたと同じくらい善良な人間さ」(290)と応じる。ここでポインターが、ハルガの問いかけに侮辱の可能性を感じたのは、やはり「善良な」という言葉に込められた、無知なため理解力に乏しい、あるいは既存の価値を疑い批判しようとしなないという意味を察知したからであり、この意味において、「彼女と同じくらい善人」と返答した彼の言葉には、侮辱を侮辱で返そうとする意図が込められていることは疑いない。

ポインターの「いっしょに楽しいことを始めよう」(290)との提案に、ハルガは義足を返すように迫る。彼女の要求に取り合おうとしない彼に対して、彼女は次のように述べる。

「あなたはキリスト教徒でしょ！」彼女はかすれ声で言った。
「あなたは立派なキリスト教徒ね！ほかの連中と同じだわ一言うこととすることが違うのよ。完璧なキリスト教徒よ。あなたは…」(290)

彼女は「キリスト教徒 (a Christian)」という言葉を繰り返しているが、同じ言葉でも全く違った意味で使われていることが読み取れる。もちろん、二度目の言葉には、キリスト教の信仰の深さを見せかけながらも現実にはそうではない欺瞞に満ちた人々への批判が込められていることは明らかである。だが、最初の場合の言葉の意味は、「キリスト教徒」ならば偽りの言葉を発してはならず、言葉と行動が一致することが求められているはずである、という価値観のもとでとっさに発せられた言動であり、それは皮肉にも、母親のホープウェル夫人がキリスト教徒に対して抱く、キリスト教徒として持つべき世俗の価値観と一致していると言える。先に述べたように、夫人の歡心を巧みに買おうとするポインターが彼女に向かって、「奥さんがキリスト教徒であることはよくわかります。お顔の一つ一つの線にそれがあらわれています」(278)と述べているが、それは狡猾な彼が、キリスト教徒としてあり得べき価値観を抱いた人間として見られることを望む彼女の願望、いわば精神的な面で世俗的に評価される人物であると見なされたいと思う彼女の願望を見抜いているからであろう。彼女がこうした願望を抱くのは、誠実なキリスト教徒として振る舞う姿を見せることが正しいという世俗の価値観をやはり権威であるかの如くとらえ、それを彼女が「善良」と見なす「田舎の人々」と同様、何ら疑いなく受け入れようとする姿勢を彼女自身が抱いていることを示している。

ハルガも同様である。徹底して母親に反抗し続けようとして、無神論者の立場を装ってきた彼女だが、彼女にとってキリスト教徒としてのあり得べき姿はやはり母親と同様、世俗的に疑問の余地がないとされるキリスト教の教えを無批判に受け入れようとする姿勢を保持していることであり、その姿勢が「あなたはキリスト教徒でしょ！」というとっさの言葉になって表れたものと考えられる。ホープウェル夫人は、ポインターを指して「死ぬほど退屈したけど、ほんとうにまじめで真摯な人だったのよ」(282)と述べているが、この言葉を耳にし、自身も彼を目にしていたハルガは、なおさら彼がキリスト教徒として言葉に偽りが無いものと思ったにちがいない。

このように、誠実なキリスト教徒として見なされることを無条件に望んでいるホープウェル夫人とハルガだが、それはすなわち、二人とも、聖書の言葉と

結びつく格言的な決まり文句に象徴される、権威あると見なされる世俗の価値を無批判に受け入れる姿勢を備えていると言い換えてもよいであろう。加えて、「ホープウェル夫人もハルガも表面的な根拠で他人を判断する習慣がある」(Gordon 177)とサラ・ゴードンが述べているように、二人とも他人の判断において表面的な基準しか持たないにも関わらず、それぞれ、自分こそが独自の考えや、深遠な考えを抱いているという自意識過剰とも言える特質を持ち合わせている。

ただし前述のように、ホープウェル夫人の場合、癖の強いフリーマンさんの行動にも耐えることができる「忍耐力の非常に強い女」(273)であり、この彼女の属性の描写に続いて格言的な決まり文句とそれを生活に利用しようとする彼女の心得が描写されていることを軽視はできないのではないか。つまり、「完全なものは何もない」という格言的な決まり文句と、フリーマンさん夫婦に「善良な田舎の人たち」としての特性を見出し、小作人として彼らを上手に処遇しようとする彼女の心得が述べられているが、それは、彼女がその言葉を生活および、農場経営上の指針として活用し、その指針を強い忍耐で支え実践してこうとする彼女の姿勢を示唆していると考えられる。このことから彼女の場合には、一方では、世俗的価値観を無批判に受け入れるがため、時としてその理念と実際の行動には矛盾や一貫性の欠如が見られながらも、また一方では、並外れた忍耐力で受け入れた価値観を支えそれを生活上の心の頼りとすることで、その世俗的価値の盲信の弊害を凌駕する可能性すら示唆されていることは否定できないと言える。

一方ハルガの場合、権威を盲信しようとする姿勢がポインターによって義足を奪われる事態に追い込まれる原因となっていると言えるが、彼女にとっての権威とは教育であり、その権威の表象は知性の最高の権威としての哲学博士をはじめとした学位である。彼女が身につけた教育を絶対化し権威化しようとする姿勢は、ポインターに向かって、「私はいくつも学位を持っているのよ」(288)と述べる言動に表れていると言えよう。この教育は、片足を失ってしまった彼女の恥辱を徹底して取り除くことを可能にした一方で、「彼女から純真な気持ちを奪ってしまった」(HB 170)のである。それはまた、後天的に身につけたという点で人為的なものであり、彼女自身の努力によって成果を成し遂げたという意味では彼女独自のものである。彼女は、自身の恥辱を完全に取り去ることを可能にしたその魔法の力を持つような教育へ思いを、やはり人為的な彼女独自のこの義足に密かに込めたのであろう。彼女が「孔雀がその尾を気にするように」(288)義足を気にし、また「だれかほかの人が自分の魂を大切にすると同じく」(288)義足を大切に扱い、密かにそっと手入れしていたのも、その義足こそ現在の彼女を形成してきた教育の象徴、すなわち、自分を支える権威の象徴であると見なしているからにちがいない。

眼鏡を奪われ視力を失ったハルガは、緑色の斑模様湖を越えていくポインターの青い姿を「心の目で見た」(Whit 78)と考えられるが、そのとき、玉ねぎを掘っていたホープウェル夫人とフリーマンさんも彼の姿を認める。ポインターを「気のいい退屈な若者(nice dull young man)」(291)だと見なす夫人が彼を指して、「私たちがみんなあのくらい単純だと、世の中はもっとよくなると思うわ」と言うのに対して、フリーマンさんは「悪臭のする玉ねぎの芽(evil-smelling onion shoot)」(291)に注意を戻しながら、「人によってはそれほど単純じゃありませんよ。私はそう単純にはなれないとわかっています」と述べる。ホープウェル夫人とは異なり、ポインターの本性を察知したフリーマンさんが「悪臭のする」(291)玉ねぎの芽に注意を戻しながらホープウェ

ル夫人の発言に反論しているのは、彼に悪の匂いを嗅ぎ取っているからであろう。

ハルガは、ポインターに「貫き通すような眼差し」(288)でじっと見つめられたとき、「その目つきはなぜか見慣れたもののように思われたが、以前どこでその目で見られたのかわからなかった」(283)と述べている。その眼差しは義足に興味を寄せていることを示した際にフリーマンさん見せた「きらめく鋼鉄のように鋭い目」(275)であることは疑いない。彼ら二人は、欺瞞や偽善を見抜く性質を備えており、相違点といえば、フリーマンさんは寓意的な人物としてではなく実在的、現実的な人物として描かれており、それが証拠に、彼女はハルガの義足に込められた欺瞞に気がついていても、それを排除するような行為には及ばない。また冒頭部で描写されているように、めったにないといえ間違いをすることがある。

ポインターは相手の心の動きに合わせて話の内容を巧みに変えることができるが、「頭の回転が速い」(273)フリーマンさんも、たいていの場合において、相手の話に合わせて「まるで道路の黄色いセンターラインに沿って進むように」(271)向きを変えることができる。このことは、素早く相手の意向を読み取り相手の機嫌を大きく損ねる前にとっさに身をかわすすべを心得ていることを意味しており、これが癖の強さを緩和させ、ことさら物事を批判的にとらえないホープウェル夫人に彼女を善良な田舎の人と思わせる一要因ともなっていると考えられる。

5

ポインターを純朴で善良な田舎の人としか見ないホープウェル夫人は、彼の悪魔性に気がつくことはなかった。「生命を失うものはこれを得べし」(280)という聖書の言葉を彼が告げたとき、彼女が微笑すらできないほど彼の様子が「あまりにも誠実で、純真で、熱心」(280)であったために、彼女は彼が決して「気のいい退屈な若者」(291)であることを疑う余地はなかったのであろう。しかし、問題は、彼の発した言葉が世俗の価値基準では否定されることはない聖句とも言うべきものであり、それが誠実で善良な姿勢で語られたがために、つまり善の言葉が善の姿勢で語られるがために、彼女ははいても簡単に無批判に、その聖句はもちろんのこと彼の人間性までも信じてしまっていることである。

オコナーは、「なぜそれほどグロテスクな登場人物を描くのか、事もあろうになぜグロテスクを描くことを使命と思うのか」⁴と尋ねられたのを機に、次のような考察に至っている。

私たちのほとんどは悪の顔を冷静に見据えることを心得ており、そして多くの場合、我々自身の顔に理由もなくニヤリとした表情を浮かべていることがわかる。しかし、善となると話は違う。善の顔がグロテスクであるという事実、善は我々の中で未完成なのだという事実を受け入れるまで、長い間善を凝視した人はほとんどいない。悪の様相はたいていそれにふさわしい表現が与えられる。善の様相は、陳腐な決まり文句かその外観を穏やかなものにしてしまうような表現でしか、言い表すことはできない。

(MM 226)

善の様相は悪のそれとは違って、容易にその本性を見抜くことはできない。ホーブウェル夫人にしても、あるいはハルガにしても同様に、陳腐な決まり文句によって表現された善の様相、つまり世俗的に絶対的に正しいと見なされている権威と化した善の考えを、皮肉にも彼女たちが軽蔑する「善良な田舎の人々」の如く無批判に受け入れ、ポインターの悪魔の性質を見抜くことができなかった。もちろん、比喻の描写レベルにおいては、ハルガにとってポインターは彼女に衝撃を与えることを通して、本来の無垢な心の状態に回帰するための恩寵をもたらすという大切な役割を担っていたと言える。しかし、物語の中では現実の出来事も等しく重要であり、その描写レベルにおいては、彼は絶対的善を教育、すなわち知性の最高の権威としての博士号という学位に表象される教育に置きそれを義足に託してきた彼女からその義足を奪った。結局彼女は、善の装いをした悪魔ポインターによって義足を奪われ、それまでの価値観を衝撃的な形で捨てることを余儀なくされたのだ。このように見た場合、義足を奪われたハルガの物語を通して示唆されていることは、一見誰もが否定しえない善を装った悪を無批判に受け入れ、欺かれてしまうことの危うさである。つまり、善を装い権威と化した悪を凝視しないまま、無意識のうちにその権威という罠に囚われ騙されてしまうことの危うさなのである。

注

1. Flannery O'Connor. *The Habit of Being*. Ed. Sally Fitzgerald. New York: The Noonday Press, 1979. , p.75. 訳は拙訳。以下 *HB* と略記。
2. テキストは Flannery O'Connor. *The Complete Stories*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1971. を使用。訳は拙訳。なお訳出にあたっては、須山静夫訳『オコナー短編集』(新潮文庫、1974年)、および横山貞子訳『フラナリー・オコナー全短編(上巻)』(ちくま書房、2003年)を参照した。以下引用の後、括弧内にページ数を示す。
3. ポインターに向かって彼女は「見るべきものは何もない」(288)と述べているが、「この「何もない」という言葉の目的語は、形而上学的な光景ではなく彼女が見るべきものを何も見出すことができない」(Eggenschwiler 54)ことを意味していると言える。
4. Flannery O'Connor. *Mystery and Manners*. Eds. Sally and Robert Fitzgerald. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1979. , p.225. 訳は拙訳。訳出にあたっては、上杉明訳『秘義と習俗—フラナリー・オコナー全エッセイ集』(春秋社、1999年)を参照した。以下 *MM* と略記。

引用文献

- Asals, Fredrick. *Flannery O'Connor: The Imagination of Extremity*. Athens: U of Georgia P, 1982.
- Brinkmeyer, Robert H., Jr. *Katherine Anne Porter's Artistic Development: Primitivism, Traditionalism, and Totalitarianism*. Baton Rouge: Louisiana State UP, c1993.

- Eggenschwiler, David. *The Christian Humanism of Flannery O'Connor*. Detroit: Wayne State UP, 1972.
- Feeley, Kathleen. *Flannery O'Connor: Voice of the Peacock*. New Brunswick, NJ: Rutgers UP, 1972.
- Gooch, Brad. *A life of Flannery O'Connor*. New York: Little, Brown and Co., 2009.
- Gordon, Sarah. *Flannery O'Connor: The Obedient Imagination*. Athens: The U of Georgia P, 2000.
- O'Connor, Flannery. *The Complete Stories*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1971.
- . *The Habit of Being*. Ed. Sally Fitzgerald. New York: The Noonday Press, 1979. (HB)
- . *Mystery and Manners*. Eds. Sally and Robert Fitzgerald. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1979. (MM)
- Paulson, Suzanne Morrow. *Flannery O'Connor: A Study of the Short Fiction*. Boston: Twayne, 1988.
- Whitt, Margaret. *Understanding Flannery O'Connor*. Columbia: U of South Carolina P, 1995.
- 野口肇、『フラナリー・オコナー論考』、文化書房博文社、1985年。

【会 則】

第1条 本会は日本フラナリー・オコナー協会(The Flannery O'Connor Society of Japan) と称し、略称を FOSJ とする。事務局を附則のとおり置く。

第2条 本会はフラナリー・オコナーを中心として、関連ある作家や文学の流れについて研究を行うことを目的とする。

第3条 本会は前条の目的を達成するため次の事業を行う。

1. 年次大会の開催
2. 機関誌等の発行
3. アメリカの The Flannery O'Connor Society その他内外の関連学会との連携
4. その他必要と認められる事業

第4条 本会の会費は第2条の趣旨に賛同し、所定の会費を納入するものとする。

1. 会員は、普通会员・賛助会員・学生会員の三種類とする。
2. 会費は年額とし、次の区分による。
3. 普通会员 ¥2,000 学生会員（博士課程まで） ¥1,000 賛助会員 ¥10,000 以上

第5条 本会に次の機関を置く 総会 役員会

1. 総会は本会の最高議決機関であり、毎年1回会長が招集する。
2. 役員会は役員をもって構成し、本会の運営にあたる。役員会は必要に応じ各種の小委員会を設けることができる。

第6条 本会に次の役員を置く。役員の任期は3年とし再任を妨げない。

会長1名 副会長1名 事務局長1名 幹事 若干名 監査2名

1. 役員は総会において会員が互選する。
2. 役員の役職は、総会において役員が互選する。
3. 会長は本会を代表して会務を統括し、副会長は会長を補佐する。
4. 幹事は事務局長の職務を補佐し、会務を執行する。
5. 監査は本会の財務および会務執行状況を監査する。

第7条 本会に顧問を置くことができる。顧問は役員会の推挙により、会長が委嘱し、会長及び役員会の諮問に答える。

第8条 本会の経費は会費及び寄付金により支弁する。本会の会計年度は毎年1月1日から12月31日までとする。

第9条 本会則の改正は総会の承認を経なければならない。但し、附則の事務局に関する箇所については、事後承諾とすることができる。また改正年月日の記入も省略することができる。

附則 1. 本会の準備委員会を平成 24 年 8 月 3 日,日本大学理工学部に於いて発足する。

附則 2. 本会の事務局を平成 25 年 3 月 25 日より,千葉県船橋市習志野台 7-24-1 日本大学理工学部一般教育教室英語系列 中村文紀研究室に置く。

附則 3. 会則は平成 25 年 3 月 25 日から施行する。

附則 4. 本会の事務局を平成 28 年 3 月 26 日より,暫定的に神奈川県横須賀市走水 1-10-20 防衛大学校総合教育学群外国語教育室 田中浩司研究室に置く。

附則 5. 本会の事務局を平成 29 年 3 月 25 日より,東京都八王子市東中野 742-1 中央大学文学部英語文学文化専攻 久保尚美研究室に置く。

附則 6. 平成 30 年 3 月 17 日の総会にて本規約の第 4 条の 3 及び第 8 条の改訂,第 4 条の 4 の削除,会誌「投稿規定」の規定 1 及び 3 の変更,「執筆要項」5 の削除が承認された。

附則 7. 令和 3 年 3 月 20 日の総会にて会誌「投稿規定」の規定 1 について,以下のように改訂することが承認された。

「本誌は,フラナリー・オコナー協会の学会誌であり,オンライン・ジャーナル(不定期)として発行する。」

【投稿・執筆規定】

◆投稿規定◆

1. 本誌は、フラナリー・オコナー協会の学会誌であり、原則として年に1回オンライン・ジャーナルとして発行する。
2. 投稿原稿は、フラナリー・オコナーに関連する論文とし、未発表のものに限る。但し、学会で口頭発表したものについては、その限りではない。その旨を注に明記すること。
3. 応募締切 毎年7月末日 原稿提出締切 毎年10月末日
4. 原稿送付方法 原稿をワードの添付書類としてメールで編集責任者に送ること。その際、略歴（所属学校・機関、身分）をメールの本文に記入すること。
5. 原稿採択方法 査読委員による査読を経て決定する。
6. 校正 校正は2校までとする。初校は1週間以内、再校は3日以内に返送すること。
7. 上記以外の案件については、協会役員会における判断が優先される。

◆執筆要項◆

1. 字数 和文論文は12,000字程度、英文論文は7,000語程度を目安とする。
2. 書式 和文はMS明朝、英文はCenturyとし、いずれもフォントは12ポイントで横書きとする。
3. 本文の注記
 - a) アラビア数字を用い、文末注（後注）とする。
 - b) 外国の人名・地名・書名は、初出の箇所日本語の後ろの（ ）内に併記する。
4. 書式の詳細については、『MLA 新英語論文の手引き』（北星堂）、*MLA Handbook for Writers of Research Papers* の最新版を参照のこと。

【活動報告】

◆日本フラナリー・オコナー協会 設立大会

日時：平成 25 年 3 月 26 日（火）15:00 ～18:00

場所：日本大学理工学部駿河台校舎 5 号館 2 階 524 会議室

総合司会：田中 浩司 氏（防衛大学校）

開会のことば／会場校あいさつ

設立にあたって

設立準備委員会副委員長 田中 浩司 氏

特別シンポジウム 「日本におけるフラナリー・オコナー研究史」

司会・講師：野口 肇 氏 （設立準備委員会委員長／首都大学東京 名誉教授）

講師：渡辺 佳余子 氏 （元・東京成徳短期大学）

講師：中村 文紀 氏 （日本大学）

設立記念講演

演題：フラナリー・オコナーの小説世界——アメリカ南部の時空を超えて

講師：前田 絢子 氏 （フェリス女学院大学 特任教授）司会：野口 肇 氏

総会

閉会のことば

◆日本フラナリー・オコナー協会 第 2 回大会

日時：平成 26 年 3 月 26 日（火）15:00 ～18:00

場所：日本大学理工学部駿河台校舎 5 号館 2 階 524 会議室

総合司会：渡辺 佳余子 氏 （元・東京成徳短期大学）

開会のことば／会場校あいさつ

作品研究 "The Comfort of Home"

コーディネーター：中村 文紀 氏 （日本大学）

オープンディスカッション 「cartoonist としてのフラナリー・オコナー」

モデレーター：中村 恭子 氏（白百合女子大学・非）

総会講演

演題：若き日のフラナリー・オコナー——『祈りの記』に寄せて

講師：野口 肇 氏（日本フラナリー・オコナー協会会長／首都大学東京名誉教授）

閉会のことば

◆日本フラナリー・オコナー協会 第3回大会

日時：平成28年3月26日（土）14:30～17:10

場所：日本大学理工学部駿河台校舎5号館2階524会議室

I 開会の言葉・会長挨拶（14:30～14:40）

日本フラナリー・オコナー協会会長 野口 肇氏（首都大学東京 名誉教授）

司会：田中浩司氏（防衛大学校 教授）

II 研究発表（14:45～15:30）

『『カトリック作家』フラナリー・オコナーの宗教観の特殊性——『賢い血』を中心に』

発表者：関根金太郎氏（神奈川県立藤沢清流高等学校 教諭）

司会：田中浩司氏

III 講演（15:40～16:30）

演題：「フラナリー・オコナーのための翻訳の日々」

講師：田中浩司氏

司会：野口 肇氏

IV 総会（16:30～17:00）

司会兼報告：田中浩司氏

会計報告

役員改選

新会長挨拶

次号学会誌原稿募集

その他

V 閉会の言葉（17:00～17:10）

野口 肇氏

◆日本フラナリー・オコナー協会 第4回大会

日時：平成29年3月25日(土) 15:30~17:10

場所：明治学院大学白金キャンパス 本館8階81会議室

I 開会の言葉・会長挨拶 (15:30~15:40)

日本フラナリー・オコナー協会会長 野口 肇氏 (首都大学東京 名誉教授)

司会：田中浩司氏 (防衛大学校 教授)

II 総会 (15:45~16:00)

司会：田中浩司氏

会計報告：野口 肇氏

役員改選、他：田中浩司氏

III 研究発表 (16:00~17:00)

「フラナリー・オコナーの作品における“emptiness”

—“A Temple of the Holy Ghost”を中心に—

発表者：久保尚美氏 (中央大学文学部 准教授)

司会：渡辺佳余子氏 (東京成徳短期大学 元教授)

IV 閉会の言葉 (17:00~17:10)

田中浩司氏

◆日本フラナリー・オコナー協会 第5回大会

日時：平成30年3月17日(土) 15:00~18:00

場所：明治学院大学白金キャンパス 本館8階81会議室

I 開会の言葉・会長挨拶 (15:00~15:10)

日本フラナリー・オコナー協会会長 野口 肇氏 (首都大学東京 名誉教授)

司会：久保尚美氏 (中央大学 准教授)

II 研究報告 (15:15~16:45)

「オコナーの作品構築にみるカトリック・アイデンティティ」

発表者：亀田政則氏 (福島県立医科大学 教授)

司会：久保尚美氏

III 総会 (16:50~17:10)

司会：田中浩司氏 (防衛大学校 教授)

会計報告：野口 肇氏

会則改訂、その他：久保尚美氏

IV 閉会の言葉（17:10～17:15）

田中浩司氏

◆日本フラナリー・オコナー協会 第6回大会

日時：平成31年3月16日（土）15:00～18:00

場所：明治学院大学白金キャンパス 本館81会議室

I 開会の言葉・会長挨拶（15:00～15:10）

日本フラナリー・オコナー協会会長 野口 肇氏（東京都立大学 名誉教授）

司会：久保 尚美氏（中央大学 准教授）

II 研究発表（15:15～16:15）

研究報告：フラナリー・オコナーの作品における「南部白人」の構築性 —”manners”の一側面として

発表者：久保尚美氏

司会：田中浩司氏（防衛大学校 教授）

III 総会（16:20～16:50）

司会：田中 浩司氏

会計報告：野口 肇氏

事務局より：久保 尚美氏

IV 閉会の言葉（17:00～17:10）

田中 浩司氏

懇親会（18:00～20:00）

◆日本フラナリー・オコナー協会 第7回大会（オンライン）

日時：令和3年3月20日（土）15:00～17:00

I 開会の言葉・会長挨拶（15:00～15:10）

日本フラナリー・オコナー協会会長 野口 肇氏（首都大学東京 名誉教授）

司会：久保 尚美氏（中央大学 准教授）

II 研究発表（15:10～16:30）

研究発表：Parker's Back to the Garden

発表者：吉岡リサ氏（川崎医療福祉大学 特任教授）
司会：田中 浩司氏（防衛大学校 教授）

III 総会（16:30～16:50）

司会：田中 浩司氏
会計報告：久保 尚美氏
事務局より：久保 尚美氏

IV 閉会の言葉（16:50～17:00）

田中 浩司氏

◆令和3年 夏の読書会（第1回）（オンライン）

日時：令和3年8月21日（土）午後13:00～15:00

対象作品：“A Good Man Is Hard to Find”

◆日本フラナリー・オコナー協会 第8回大会（オンライン）

日時：令和4年3月19日（土）14:00～16:00

読書会（第2回）（14:00～15:50）

対象作品：“Good Country People”

総会（15:50～16:00）

会計報告,事務局より

◆日本フラナリー・オコナー協会 第9回大会

日時：令和5年3月17日（金）14:00～17:00

場所：中央大学 多摩キャンパス 3号館 3257教室

I 開会の言葉・会長挨拶（14:00～14:10）

日本フラナリー・オコナー協会会長 野口 肇氏（首都大学東京名誉教授）
司会：久保 尚美氏（中央大学 准教授）

II 研究発表（14:15～14:45）

「フラナリー・オコナーの特異性
—アメリカ女性作家に関する計量分析的研究—」

発表者：田中 浩司氏（防衛大学校 教授）
司会：久保 尚美氏

III 読書会（第3回）（14:50～16:30）

対象作品：Flannery O'Connor, “The Enduring Chill”

司会：亀田 政則氏（福島県立医科大学 名誉教授）

IV 総会（16:35～16:50）

司会：田中 浩司氏（防衛大学校 教授）

会計報告：久保 尚美氏

事務局より：久保 尚美氏

V 閉会の言葉（16:45～16:55）田中 浩司氏

◆令和5年夏の研究会・読書会(第4回)

日時：令和5年8月19日(土)（14:00～16:30）

場所：中央大学 茗荷谷キャンパス 2E05 教室

開会の言葉・会長挨拶 日本フラナリー・オコナー協会会長 野口 肇氏

（首都大学東京・名誉教授）

第1部 研究発表「ゲームの中の文学—Night in the Woods における
フラナリー・オコナーの影響」

発表者：関根 金太郎氏

司会：田中 浩司氏（防衛大学校 教授）

第2部 “A View of the Woods” 読書会

◆日本フラナリー・オコナー協会 第10回大会

日時：令和6年3月16日（土）13:30～17:00

場所：中央大学 多摩キャンパス 3号館 3260 教室

I 開会の言葉

II 研究発表

「“Dry September”に見られる米国南部の歴史的・文化的影響と“Everything That Rises Must Converge”に込められた理念と現実との統合」

発表者：加藤 良浩氏（北里大学・東京未来大学 非常勤講師）

司会：久保 尚美氏（中央大学 准教授）

III 読書会（第5回）

対象作品：Flannery O'Connor, “The Artificial Nigger”

司会：亀田政則氏（福島県立医科大学名誉教授）

VI 総会 司会：久保 尚美氏

IV 閉会の言葉

◆令和6年夏の研究会・読書会（第6回）

日時：8月17日（土）14：00～17：00

会場：中央大学 多摩キャンパス（3260教室）

開会の言葉：日本フラナリー・オコナー協会会長 田中浩司氏（防衛大学校 教授）

I. 研究発表（14：10～15：10）

発表者：亀田政則氏（福島県立医科大学 名誉教授）

「*Wise Blood* の論理構成」

司会：久保尚美氏（中央大学 准教授）

II. 読書会（15：15～16：45）

”Parker’s Back”

司会：渡辺佳余子氏（東京成徳短期大学 元教授）

【事務局より】

2025年は、フラナリー・オコナーの生誕100周年という特別な年ですが、それに先んずるようなタイミングで、オコナーを題材にした映画『Wildcat』が、2022年にサンダンス映画祭でプレミア上映された後、2024年にアメリカで公開されました。この映画の監督・共同脚本はイーサン・ホークが手掛け、娘のマヤ・ホークがオコナーを演じているということで、注目を集めています。

『Wildcat』は、伝記映画のスタイルをベースに、オコナーの短編小説「Comforts of Home」「The Life You Save May Be Your Own」「Revelation」「Parker's Back」「Good Country People」からのシーンが巧妙に織り交ぜられ、作家オコナーの若き日々と彼女の作品世界を行き来するような独創的な構成が話題となっています。日本での公開が待ち望まれる映画です。

日本フラナリー・オコナー協会は、今年の3月で設立12周年を迎えます。これもひとえに、オコナーの作品に関心を持ち、その意味を共に深く掘り下げようとする皆さまのおかげです。協会の研究誌『フラナリー・オコナー研究』も、今号で第4号を発行することができました。オコナーの文学に触れるなかで得た新たな知見を、こうして広く皆さまと分かち合えることに、心より感謝いたします。これからも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

(久保)

【執筆者紹介】

加藤 良浩（東北公益文科大学 准教授）

『フラナリー・オコナー研究』第4号

The Journal of Flannery O'Connor, vol. 3.

ISSN 2188-9716 2025年2月1日発行

発行者 日本フラナリー・オコナー協会

[事務局] 〒192-0393 東京都八王子市東中野 742-1
中央大学 文学部 英語文学文化専攻 久保研究室内